

平成14年(2002年)6月26日 水曜日

坂戸工作所⑧

北野靖志の「元気が行く」

現場レポート・元氣印経営の秘密

一九七〇年(昭和四十五年)二月、当時、油谷重工業(株)の社員として、油谷重工業の工場に勤務していた坂戸誠一(まこと)のところに一本の電話が入った。父、正四郎(しやうしやうらう)が納めたヤードクレーンがトラぶって、会社中がでんやわんやしていたときだった。電話の主は坂戸工作所の経理担当者からだった。

「誠ちゃん、会社が大変だ。このままでは会社がつぶれる。一日も早く帰ってきてほしい」

電話の口調から父がただならぬ事態にあることを感じた。誠一は六七年、早大を卒業すると「他人の飯を食う

のも勉強になる」という父の勧めもあって三年前から

術屋たちに混じって、資材手配から工程管理を担当した。おかげで設計図はひけないまでも見れるようになったし、資材に関する知識を身につけた。さらには労組も経験した。油谷でのサラリーマン生活はそれなりに充実していただけに、辞め

共振止まらず納期1年遅れ
金を追うな③

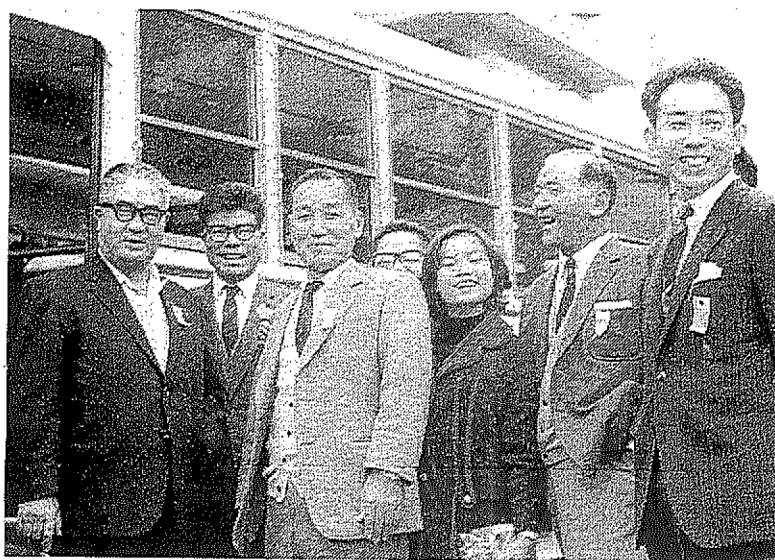
油谷重工業で働いていた。油谷重工業には戦前、父正四郎も働いていた。誠一は事務系なので本来、営業、総務、企画部などに配属されるが、「やりたいことをやりなさい」という社長の粋な計らいで技術畑に配属されていた。広島工場では技

術屋たちに混じって、資材手配から工程管理を担当した。おかげで設計図はひけないまでも見れるようになったし、資材に関する知識を身につけた。さらには労組も経験した。油谷でのサラリーマン生活はそれなりに充実していただけに、辞め

《坂戸工作所》
社長＝坂戸誠一氏
住所＝千葉県花見川区
☎043・259・0131
業種＝解体機械製造業
資本金＝5720万円
設立＝1945年4月
従業員数＝30人
年間売上高＝9億円
(2002年度見込み)

「まず振動の原因をつかまえることが先決だ」と、母校の早大に「計算に強い先生を紹介してくれ」と駆け込んだ。

理工学部教授は一人の卒業生を紹介してくれた。坂戸が持参した設計図を一瞥(いちべつ)すると、すべて計算し直し始めた。新しい設計図に基づいたヤードクレーンができあがった。びたっと振動が収まり、無



坂戸工作所の創業者、坂戸正四郎は大型クレーン修理では日本一だった。1971年、協力工場の社員らとの香港旅行で談笑する正四郎(右から2人目)

事、納入した。造船所と結んだ契約の納入期限からは一年近くも過ぎていた。元の隅田川工業を訪ね、頭

を下げた。二人とも不良品を作り、結果として造船所に多大な損害をかけたことで、多額な金を請求されても仕方ないと覚悟していた。

「工場も家屋敷も手放すことになるかもしれない」造船所の社長はいった。「私はお父さんならできると信じて頼んだのだ。一年かかるのが、二年かかるうが関係ないよ。作ってくればそれでいいんだ。こっちは心配するな」

父の正四郎は大声で泣いた。誠一は父が泣く姿を初めてみた。坂戸工作所はこれをきっかけにクレーンなどの産業機械の製造から

文中敬称略
(論説委員長)